

私の履歴書

前橋 汀子

⑥

シゲティは貴賓席へ挨拶に来ていたのだ。

巨匠は急に飛び出してきた少女の頭を優しくなでてくれた。終演後、私は母に「パイオリンのおじさんに頭をなでられた」と言ったそう。

15年後、私はこの「おじさん」に師事し、スイスのモントルーにあったシゲティ邸の近所に住んで個人レッスンを

私の人生を変えたともいえるコンサートがある。55年2月に初来日したソ連の世界的なバイオリニスト、ダヴィッド・オイストラフの公演だ。日比谷公会堂の客席に陣取った私は小学5年生だった。

あんなバイオリンの演奏は聴いたことがなかった。大きなホールで、アンナ先生の勧めでリサイタルを開いた。会場は東京のヤマハホール。

1957年1月には、小野

巨匠の公演

私は2階席の通路に新聞紙を敷いて演奏に聴き入った。

1953年3月5

日という日付まで覚えていたのは、その

日にロシアの作曲家プロコフィエフが亡

一流の演奏 歴史的な1日

頭なでてくれた「おじさん」

地の「プロコフィエフ没後10

年」の記念コンサートでプロ

コフィエフのバイオリンソナタを演奏することになる。何とも不思議な巡り合わせだ。

シゲティの音楽会では、もう一つ忘れられない出来事があった。休憩時間に客席の一

部に人だかりができていた。大人たちの足をくぐり抜け

ると、さっきまでステージにいた巨匠が目の前に現れた。

受けることになる。

母方の祖父や母は、こうし

た音楽会によく連れて行って

くれた。世界の一流の演奏に触れさせようという親心だろ

う。特に母は家計をやりくりしながら音楽会の情報を調べ、貴重な切符を手に入れた。

ただし母に買える切符は1枚だけ。私が演奏を聴いている

間、母はホールの前で待っていてくれた。



筆者のリサイタルでアンナ先生と

人前で演奏するためには一定の準備期間をとり、相当に集中して練習しなくてはならないが、

な体と楽器が一体となった、ふくよかな響き。「楽器が体の一部みたい。バイオリンでこんな音が出せるんだ」。まさに衝撃だった。

「ソ連で勉強すればオイストラフのように弾けるようになるかしら」。私の心に大きな火がともった瞬間だった。

小学6年の時、全日本学生

(バイオリニスト)